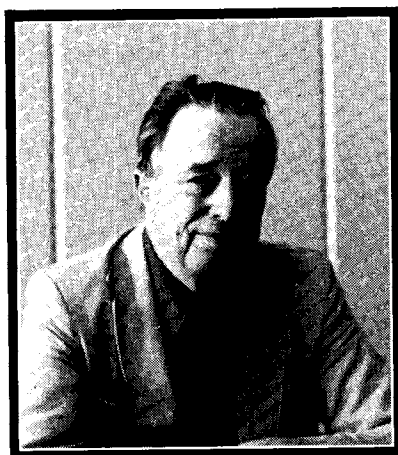


Sunner 教授の急逝を悼む

晴天の霹靂という言葉を使うのは生れて始めてである。それほど突然の、全く予期しない知らせであった。この4月にお会いした時は非常にお元気そうで、進行中の実験やこれからの計画を情熱的に話されていた。それほど衝撃的なニュースであった。Smith教授の後を継ぎ、Lund大学の熱化学研究室を世界の熱化学センターにまで育てられたSunner教授の急逝の知らせを受けた時、一瞬言葉を失った。

Sunner教授が日本学術振興会の招きで日本に滞在されたのは1973年秋である。第9回熱測定討論会で特別講演されたのが、まるで昨日のことのように思い出される。3ヶ月の関研究室滞在中に何回かのセミナーと個人的接触を通じて、その一流の国際的感覚と学問的情熱を学びとったのである。これが機縁となって両グループは姉妹研究室の間柄となり、人事交流を含めた学問的交流が活発となった。この4月に関先生とご一緒に招待されたのも、断熱型カロリメータのマイクロ化に関する具体的議論を行うのが一つの目的でもあった。

IUPACやCODATAなどの国際協力機関との関わり



も極めて深く、熱力学および熱化学委員会50年史のご寄稿が本会誌の創刊号を飾ったのも、同教授のご配慮の賜物である。また、化学熱力学国際会議を2度(1963年Lund, 1977年Ronneby)も組織されたり、弟子のM. MånssonとIUPAC, Experimental Chemical Thermodynamics, Vol. 1 Combustion Calorimetryを編集されるなど、学界に対する貢献は測り知れない。数多く手掛けられたカロリメータの開発は、マイクロボンベカロリメータの製作で頂点

に達する。その設計は繊細を極め、まるで芸術品を見る思いである。

今年の第6回熱力学国際会議には、冒頭にRossini記念講演を行うべく、また秋のCODATA総会にも元役員として来日を予定しておられたなど、世界の指導的立場におられただけに、その損失はかけ替えのない痛恨事である。同教授の包容力ある人柄と深い配慮に心打たれない人はいない筈である。化学熱力学の分野に新しい道を切り開き、そのアクティビティを一層高めることが故人の霊を安らかにし、その学問的恩義に報ゆる唯一の道と信ずるのである。(大阪大学理学部 菅 宏)

石村 壹先生の御逝去を悼む

福井大学教育学部教授石村 壹氏は昭和55年4月27日突然脳出血で急逝されました。同氏は昭和23年 京都大学理学部化学科を御卒業、一旦高等学校教諭をつとめられた後、同29年 改めて京都大学大学院に入学されたが、34年10月京都大学理学部助手となられ、次いで京都工芸繊維大学講師、福井大学工学部助教授を経て、40年教育学部助教授、さらに46年教授に昇任された。54年9月福井大学評議員に併任され、その在任中に逝去されたものである。

同氏は学生に対する真摯な化学教育のかたわら、自らも微小質量測定的手法に意を注いだ熱分解反応の研究に従事された。すなわち真空中での低圧気体と固体間の表面反応や吸着現象の微小重量測定のために、ガルブラン

ゼン型マイクロバランスの試作に成功、これは実験化学講座に、また真空秤量に関しては真空工学ハンドブックにそれぞれ執筆されている。また無機化合物に対する示差熱高分解能質量分析同時測定法の開発という画期的な研究成果は産業開発社の「分析機器」などに発表されている。またそれらに関連する論文も10指に余り、一方高等学校の理科教育に対する関心も深く、その方面の発表も多い。なお質量の精密測定の研究促進を目的とする質量測定研究会を組織し、その委員長としても活動。また日本化学会や日本熱測定学会の各委員や日本真空協会の地方編集委員のほか、工業技術院計量研究所研究員および国際計量研究連絡委員会専門委員としても活躍しておられた。

同氏に接した人は誰も、包容力のある落ち着いた人柄と暖かく円満な人格に引かれぬ者はなく、それでいて精密測定を本領とした厳しくかつ緻密な性格は人後に落

ちず、55才の若さでの急逝はひとしく惜しみかつ悲しむものである。謹んで哀悼の意を表する次第であります。
(金沢大学理学部 土屋亮吉)

NPL と Larkin 博士, そして International DATA Series B(IDS(B))について

昨年の初秋のある日、フランス滞在中の余暇を利用して英国のNPL(National Physical Laboratory)にLarkin博士を訪問する機会があった。NPLはウォータールー駅から英国鉄道で1時間程、ロンドン郊外の静かなTeddingtonの町にある。Larkin博士は1960年の初頭に発表されたLarkin-McGlashanの熱量計でわれわれにはお馴染みの人であり、彼等のベンゼン-四塩化炭素系の混合熱データは現在においても溶液熱量計の検定の際の標準値とみなすことができる。現在はNPLのChemical Standards Divisionで活躍されており気液平衡関係の研究で著名なPemberton博士とともに研究所を案内していただいた。

NPLの研究プログラムの一つとして非電解質水溶液の広範囲な温度領域にわたる精確な熱力学的性質の系統的なデータの集積、研究がとりあげられている。これは工学的な面からも水溶液の性質と構造を理解するためにも重要であるにもかかわらず室温前後での測定がこれまでの報告例の殆どであるという現状によるものであろう。

これと関連して溶液熱量計談義に話がはずんだ。現在は希釈型やフロー型が主流の観を呈してはいるが、それらの熱量計で混合熱の温度変化を試料液体の沸点付近まで測定された例があるかどうか、そしてそれは可能かどうか、私の熱量計はバッチ型で能率は劣るがそれが可能であると述べられたのが印象的であった。そしてエタノール水溶液の混合熱の298.15 K~383.15 Kにもわたる素

晴しい測定結果は筆者の記憶にも新しいものであった。

Larkin博士がその精力を注がれている一つにIDS(B)プロジェクトがある(IDSについては中西浩一郎氏による詳細な解説が本誌4, 28(1977)に与えられているので参照されたい)。Larkin博士はIDSプロジェクトのうちSeries B: Thermodynamic Properties of Aqueous Organic MixturesのEditor-in-Chiefをされている。IDS(B)は1979年9月にSecond issueが発行され、お会いした時に丁度Third issueの編集をされているところであった。そしてこれを充実させて行きたいのだがDATA tableの投稿者がまだまだ少く、日本の熱測定学会へも大いに宣伝して欲しいと熱心に依頼された。今後これが充実してcritically selected DATA tableが発行されるようになれば極めて貴重で便利なデータソースとして役立つことになるであろう。本会会員からもIDSプロジェクトに多くの方が寄与されることをLarkin博士とともに本誌上でお願いたく思う。

NPLの紹介については今回は限られた紙面なので割愛させていただいた。Larkin博士は論文を通じて日本の研究者を良く知っている、しかし自分にとって日本は未知の国であるのでいつか訪問したい国であると述べられた。そして筆者も将来には本学会へ招待したい外国人研究者の一人であると感じたことである。

(京都大学工学部 東原秀和)

第2回ヨーロッパ熱分析シンポジウム(ESTA)

1976年に英国のSalfordで開催された第1回シンポジウム(25ヶ国より250名が参加)に続いて、第2回シンポジウム(ESTA 2)が1981年9月1日~4日スコットランドのAberdeenで開催される。熱分析に関するあらゆる分野がカバーされ、装置の展示も行われることになっている。

講演希望者は1980年10月31日迄に100~150語の要旨を添えて申し込むこと。詳しい要旨は1981年2月28日迄に提出。

講演申込先

Dr. F. P. Glasser
Chairman, Organising Committee ESTA 2
Department of Chemistry
University of Aberdeen
Meston Walk, Old Aberdeen
AB9 2UE, SCOTLAND

詳細については学会事務局に問い合わせられたい。